

新版『資本論』第1巻講座、第1講義

新版『資本論』第1巻第1部講座をはじめるとあたって

主催：千葉県学習協会

ところ：千葉県自治体福祉センター

日時：2022年6月19日（日）午後1時～5時

講師：萩原伸次郎（横浜国立大学名誉教授）

カール・マルクスの人生と『資本論』第1巻完成までの道のり

これからわれわれが学ぼうとする『資本論』の著者、カール・マルクス (Karl Heinrich Marx) とは、どのような生き方をした人なのだろうか。まずその生い立ちからことを探っていこう。マルクスは、1818年5月5日、ドイツはモーゼル川のほとり、古代ローマの遺跡が残り、現在は、モーゼルワインの中心的生産地、フランスの影響が色濃く残る、トリアで、裕福な中産階級の子として生まれた。1883年3月14日、亡命先のロンドンで亡くなり、現在墓は、ロンドンの北、ハイゲート墓地にあり、頭でっかちのあまり評判のよくない墓石が立てられている。しかし、これは、イギリスでの有名人のお墓の形式にのっとったものようだ。

マルクスの一生は、まさに波乱に満ちたものだった。まず、17歳のとき、ボン大学に法律を学びに入学する。ここで終生の伴侶となる幼馴染みのイェンニー・ホン・ウェストファーレン (Jenny von Westphalen) と婚約する。ホンが付くのは貴族の称号といわれているから、彼女は貴族の出身ということになる。マルクスの父は、よりいっそう法律の勉強をさせるため、彼をボンからベルリン大学へ送るが、マルクスは、父の意向に反して、ヘーゲル哲学に興味を持ち、ヘーゲル左派の運動に加わり、キリスト教批判など、プロシヤ専制政治と対決する。マルクスは、哲学を専門として、大学に職を得ようとするのだが、プロシヤ政府の認めるところとはならず、かくて、アカデミズムに別れを告げ、ジャーナリズムの道を探り、1842年10月、自由主義新聞『ライン新聞』の編集に携わる。しかし、マルクスの経済問題の論説が、プロシヤ政府の怒りに触れ、新聞は弾圧され、彼はフランスに亡命する。1843年末、パリに着いたマルクスは、フランスの社会主義者と交わり、『独仏年誌』の発行にかかわり、フランス社会主義とドイツ・ヘーゲル左派の運動を結び付けようと試みる。このパリ滞在中に、マルクスは、革命的民主主義者から共産主義者となり、『経済学・哲学草稿』(1844年)として知られる未定稿を書き残す。終生の友となるフリードリヒ・エンゲルス (1820-1895年) と知り合うのもこのパリである。1844年末、マルクスは、フランス・オルレアン朝の宰相ギゾーによって、パリ追放となり、エンゲルスとともにブリュッセルに移動し、3年間をそこで過ごす。『資本論』第1巻を捧げたウィルヘルム・ヴォルフと知り合ったのは、このブリュッセルだった。マルクスは、妻のイェンニーではなく、なぜ、このヴォルフに『資本論』第1巻を、捧げたのだろうか。よこみちにそれるが、このヴォルフについてみてみよう。

「忘れがたきわが友 勇敢、誠実、高潔なプロレタリアート前衛戦士 ヴィルヘルム・ヴォルフ」と、マルクスは、その献辞において書いているが、彼は、いったい何者なの

か？ Friedrich Wilhelm Wolff は、1809年6月21日に、タルナウに生まれた、とある。かれは、シレジア地方の穏健な農民の子であった。ブレスラウの一学生組織のメンバーとして4年間投獄されたが、そのブレスラウ監獄のおぞましい状況を暴露し、一躍一般大衆の目を惹いた。1846年官憲の目を逃れブリュッセルに旅し、そこでマルクス、エンゲルスの仲間に加わる。

1847年6月の共産主義者同盟設立に積極的役割を果たし、1848年4月シレジアに戻り、民主主義運動の左派に属し活動する。フランクフルト国民議会へ革命的民主主義者の一人として選出される。マルクスに委嘱され『新ライン新聞』の編集局の一員となり活躍、農業問題に専念、小農の利害を代弁し、封建的大土地所有制からの解放を主張し、ドイツ革命を闘う。彼は、ライン地方の民主運動にかかわり、マルクスの支持者とともに1849年、ドイツ独立労働者党を創設するのに尽くす。ヴォルフの政治活動は、ドイツ革命とともに終わったとあってよいだろう。1851年まで、スイスに亡命の後、イギリスに渡り、1864年、亡くなるまで、終生マルクスとエンゲルスの忠実な友であり支持者であった。しかも彼は、その遺産をマルクスに贈ったのだ。エンゲルスからマルクスへの資金援助は、有名だが、マルクスは、ヴォルフの遺産が入った年と推定される1864年と65年は、エンゲルスからの資金援助を受けていない。600から700ポンドが、遺産として、マルクスに贈られた。当時イギリスでの中流家庭の生活は年間200ポンドあれば十分だったそうだから、この遺産はマルクスにとっては有り難かったに違いない。ただし、1867年1月から2月まで、「マルクスは非常な物資的困窮に悩む。彼の家族は立ち退きを迫られ、家財の差し押さえをうけそうになる。エンゲルスがマルクスを援助する」と「マルクスとエンゲルスの生活と活動」『マルクス・エンゲルス全集』第16巻付録42頁）は伝えている。『資本論』第1巻が出版されたのは、1867年だったことを思い出そう。マルクスは、遺産を、残してくれたことへのお礼の意味をこめて、『資本論』第1巻を彼に捧げたのではないだろうか、と今宮謙二先生が、『経済』2016年5月号に書いている。ちなみに、『資本論』続巻は、妻に捧げることになっていたというけれど、それは実現されず、妻に先立たれ、つづいてマルクスは、この世を去った。

話を1840年代に戻そう。マルクスとエンゲルスは、1847年末、ロンドンでの共産主義者同盟の会議において、彼らの政治宣言を書くことを託され、1848年、後に有名となる『共産党宣言』を出版する。まさにそのときヨーロッパで革命の嵐が吹き始めるのだった。フランスの2月革命とドイツ3月革命だ。1848年始め、マルクスは、急遽パリに戻り、また、ドイツで、『新ライン新聞』を立ち上げ、主筆となる。『新ライン新聞』の編集の一員としてマルクスは、ヴォルフを任命したが、この時は、後にかれの遺産相続をすることになるなどとは夢にも思わなかったことだろう。この新聞は、プロシヤの専制政治を徹底的に批判、1848年ドイツ民主革命の拠点となるが、またもや、弾圧され1849年5月、マルクスは、ロンドンに亡命し、終生この地で暮らすことになるのである。

1850年代の前半、ロンドンのソーホー地区の3部屋という、マルクス一家のアパートメントでの暮らしが貧しかったことはあまりに有名。エンゲルの資金援助は、1860年ごろから本格的になるから、それまでの10年間のロンドン生活は、まさに爪に火を

点す生活だった。

しかし、マルクスは、この赤貧洗うがごとき生活の中、1857年までに、800ページにも上る、後に『経済学批判要綱』として公にされるものを書いており（1941年に出版される）、1859年には、『経済学批判』を出版している。『資本論』第1巻が出版されるのが、1867年だから、かなりのスローペースである。その理由をマルクスは「私の仕事を繰り返し中断させた長年にわたる病気のためである」（新版第1分冊7巻、新書版第1分冊7巻、原文11巻）としている。たしかに栄養失調から肝臓病になり黄疸をともなあってマルクスを幾度も苦しめたことはよく知られている。だが、仕事の遅れは、ただそのためだけではなさそうだ。

この辺の事情は、資本論形成史として、従来から議論されて来たところだから、少し詳しくみてみよう。マルクスが、ロンドンで本格的に経済学の研究に没頭したのは、1850年からだった。この時マルクスの頭には、経済恐慌が革命をもたらすという考えがあった。1848年2月革命、3月革命は、1847年経済恐慌と関連があるというのが、マルクスの抱いた仮説だったかもしれない。大英博物館通いで経済学関係の文献を利用し、1850年8月から53年6月まで、24冊の抜粋ノートを作成した。貨幣、信用制度から人口論や技術論も含め経済学のあらゆる領域にわたる諸問題が検討された。そして、それをもとに、1857年10月から翌年の58年5月までに7冊のノートからなる既述の草稿『経済学批判要綱』を執筆した（『資本論』第1草稿と後に言われる）。この時期のマルクスは、昼は、生活費を稼ぐため『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』への寄稿で忙しく、経済学の勉強はその後にせざるを得ず、毎日朝の4時まで頑張って仕事をしているとエンゲルスにお金の無心をする手紙の中で書いている。当時（1858年から1862年）のマルクスの経済学体系は、総括的に図示すると次のようなものだった。

I 資本

(a) 資本一般

- (1) 商品
- (2) 貨幣
- (3) 資本

- 1 貨幣の資本への転化
- 2 絶対的剰余価値
- 3 相対的剰余価値
- 4 両者の組合せ
- 5 剰余価値に関する諸学説
- 2 資本の流過程
- 3 両者の統一または資本と利潤、利子

(b) 競争

(c) 信用

(d) 株式資本

II 土地所有

III 賃労働

IV 国家

V 外国貿易

VI 世界市場（と恐慌）

前出の『経済学批判要綱』として、1941年に公表されたマルクスの著作は、この体系のI(a)資本一般に相当するものである。1859年6月に出版された『経済学批判』は、この計画に基づく第1分冊で、内容的には、I(a)(1)商品、(2)貨幣の二つの章であり、次々とこの計画に従って出版するはずだった。

その続編を出版すべくマルクスは準備を進め、1861年8月から63年7月まで新たに全部で23冊にのぼる膨大な草稿を書き上げた（『資本論』第2草稿といわれる）。全体の表題は、「経済学批判」であり、副題は、「第3章 資本一般」だったが、その中心をなすものは、「剰余価値に関する諸理論」だった。これがのちに『剰余価値学説史』となるものだが、このノートを作成している最中に、マルクスは、計画を変更し、独立の著作『資本論』（副題：「経済学批判」）として出版することを決定する（1862年12月28日付け、クーゲルマンへの手紙）。というのは、「剰余価値に関する諸理論」が、この枠を超えて大きくなり、そこに収まり切れなくなったからである。

この『資本論』は、基本的には、6部構成の第3章 資本一般を意味し、(3) 資本 1 資本の生産過程、2 資本の流通過程、3 両者の統一または、資本と利潤、利子、から構成されるものである。この出版計画の変更に伴い、マルクスは、第3章資本一般の3区分構成を基礎として、新たに『資本論』の構成プランを作成し、この計画に従って、マルクスは、1863年夏から65年末までに、新たな草稿を書き上げたが、その過程で、この出版計画をさらに変更する事態がひきおこされた。その変更に大きな影響を与えたのが、1865年前半における経済恐慌に対する新たな発見であった。この辺の事情を、新版『資本論』では、監修者の詳しい注が付けられている。「マルクスは、1863年夏から65年末までの時期に、『資本論』全三部の最初の草稿を、第一部（1863年8月—64年夏、初稿）、第三部前半（1864年夏—年末）、第二部（1865年初め—夏、第一草稿）、第三部後半（1865年夏—年末）の順序で書き上げた。マルクスは、第二部第一草稿のなかで、恐慌が資本主義的生産のもとでは、周期的に起こる循環の一局面であることを発見し、「利潤率の低下傾向」を資本主義的生産の没落の動因とする以前の立場を乗り越えた。これを転機に、『資本論』の著作構成も、第三部後半（1865年夏—年末）、第一部完成稿（1866年初め—67年4月）、および第二部の諸草稿で大きく変更された。こうして、1867年9月、『資本論』の第一部の初版が公刊された」（新版『資本論』第1分冊7～8頁、監修者注）

1863年夏から65年末までに書かれた草稿は、『資本論』第3草稿といわれるものだが、そこには、従来プランの外にあった、競争、信用、株式資本がかなり組み込まれ、II土地所有、III賃労働の一部も入り込んだとみて間違いはない。そして、その最後に『剰余価値学説史』が『資本論』第4部として位置づけられた。したがって、あらたに作成されたプランによれば、『資本論』は次の4部からなる。

第1部 資本の生産過程

第2部 資本の流通過程

第3部 総過程の諸姿容

第4部 理論の歴史のために

1866年1月、マルクスは、いよいよ『資本論』を印刷に付する準備を始めるが、最初は、全4部を2巻で、一度に出版するつもりだった。なぜなら『資本論』は、「弁証法的に編成された」「ひとつの芸術的全体」だからだ。しかし、マルクスの病状を心配するエンゲルスの強い勧めで、「同時に2巻を出すのではなくて、第1巻が出来上がり次第それを出す、という計画に代わり、その後おそくとも同年8月には、全体が2巻ではなく3巻——第1部と第2部とが第1巻、第3部が第2巻、そして学説史の第4部が第3巻——という構成にうつり、さらに同年10月から1867年3月までの間に、第1巻は第1部のみを含むものとされるに至った」（杉原四郎「1866年1月—1867年9月——『資本論』第一巻初版形成史の一齣——」経済学史学会編『「資本論」の成立』岩波書店、1967年、316頁）と杉原四郎氏は、指摘する。この変更を裏付ける証拠として、1866年10月13日付クーゲルマン宛の手紙がある。マルクスは、『資本論』の総プランをクーゲルマンに知らせ、著作は、4部からなり、第1部資本の生産過程、第2部資本の流通過程、第3部総過程の態容、第4部学説史に寄せてである。なおマルクスは、第1巻出版後、第2部と第3部を第2巻として出版し、理論の歴史を取り扱う第4部は、第3巻として出版すると初版への序言で言っているが、計画通りには実現されなかった。エンゲルスは、第2部と第3部を合わせて第2巻として出版せず、第2部だけで第2巻を出版し、その9年後第3部を第3巻として出版したからだ。第4部は、エンゲルスによっても出版することはできず、その後『剰余価値学説史』として出版され、日本語訳も出ている。

マルクスは、1866年1月から第1巻出版のため最終稿をしたためののだが、以上の出版計画の変更は、第1巻の内容にもかなりの影響を与えた。つまり、叙述の書き加えを行い、「量的にもかなり膨張した」（杉原、前掲書、322頁）のだ。マルクスの第1巻の充実は、第3篇「絶対的剰余価値の生産」第8章「労働日」第7節「標準労働日獲得のための闘争。イギリスの工場立法が他国に及ぼした反作用」ならびに第4篇「相対的剰余価値」第13章「機械と大工業」第9節「工場立法（保険及び教育条項）。イギリスにおけるその一般化」の工場立法に関わる叙述の充実であった。労働日の短縮は、未来社会の「自由な時間」論につながり、保険及び教育条項は、未来社会の教育の萌芽であり、資本主義における機械と大工業は、ジェンダー平等に基づく未来社会の基礎をつくり出していると指摘。また、第10節「大工業と農業」においては、現在の気候危機を予見、それを乗り越えることが社会的規制によって可能になることを示唆。

マルクスは、1867年に入っても、第1巻の補足を継続する。なぜなら、出版計画の変更は、第1巻を独立させて出版する以上、第1巻に著作の結論が必要になった。この補足は、第7篇「資本の蓄積過程」第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」第24章「いわゆる本源的蓄積」において行われ、資本主義的蓄積と同時に、資本主義を歴史的にとらえ、その運命を論じることになる。「資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは、否定の否定である。この否定は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代の成果——すなわち、協業と土地の共同占有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共同占有——を基礎とする個人的所有を再建する」（新版『資本論』第4分冊1332頁）と。

マルクス『資本論』第1巻の社会変革論は、労働者階級の団結による政治権力の獲得

によって実行するものであり、当時で言えば、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアなのであり、ロシア・東欧や中国でなかったことは確かだ。こうした変革論は、マルクスが 1864 年国際労働者協会創設に積極的にかかわったことが反映している。詳しくは、拙稿「新自由主義の時代に『資本論』を学ぶ意義——新版『資本論』全 12 冊完結に寄せて——」（『経済』2022 年 5 月号）をご覧ください。

第 1 部が、第 1 巻として 1867 年 9 月 14 日に出版された。初版 1000 部、売れ行きは悪く、1869 年末になってもなお 308 部の売れ残りが出た。マルクスは失望し、これはあまりに難しすぎるからだと反省し、改訂第 2 版では、とりわけ、価値形態論における叙述を大幅に変えた。

マルクスは、第 1 部の改善に努め、改訂第 2 版（1872 年～73 年）と、フランス語版（1872～75 年）を出版し、1868 年から 1881 年までは、第 2 部の諸草稿を書くが、その最後の部分第 3 篇の執筆途中で病気のため筆を止め、1883 年 3 月 14 日に亡くなった。

したがって、第 2 部、第 3 部は、エンゲルスによって彼の死後、出版された。

序言〔初版への〕1867 年 7 月 25 日

「すべてはじめはむずかしい〔ドイツの諺〕ということは、どの科学にもあてはまる」（新版第 1 分冊 8 頁、新書版第 1 分冊 7 頁、原文 11 頁）商品の分析がもっとも難しい→本書の第 1 章商品の箇所。

「経済的諸形態の分析にさいしては、顕微鏡も化学的試薬も役に立ちえない。抽象力が両者にとって代わらなければならない。」（新版第 1 分冊 9 頁、新書版第 1 分冊 8 頁、原文 12 頁）「物理学者は、自然過程を、それがもっとも典型的な形態で、またそれが攪乱的な影響によってかき乱されることがもっとも少ない状態において現象するところで、観察するか、あるいは、それが可能な場合には、過程の純粋な進行を保証する諸条件のもとで実験を行なう。」（新版第 1 分冊 11 頁、新書版第 1 分冊 9 頁、原文 12 頁）

マルクスは、自然科学の方法と社会科学の方法の類似性を強調している。事実、次の指摘は、19 世紀の自然科学的方法の社会科学への適用そのものである。「資本主義的生産の自然諸法則から生ずる社会的な敵対の発展程度の高低が、それ自体として問題になるのではない。問題なのは、これらの諸法則そのものであり、鉄の必然性をもって作用し、自己を貫徹するこれらの傾向である。産業のより発展した国は、発展の遅れた国にたいして、ほかならぬその国の未来の姿を示している。」（新版第 1 分冊 11～12 頁、新書版第 1 分冊 9～10 頁、原文 14 頁）

しかし、同時に自然科学と社会科学との違いも指摘していることに注目しよう。社会科学において分析は「抽象力」に依存するとしている。抽象力とはなんだろう。マルクスの積極的主張ではないが、抽象力は人によって違うのは誰が考えても常識であろう。自然科学では科学試薬によって、客観的判断が可能である。しかし、社会科学の分析で重要な抽象力は、人によって異なるから、いろいろな考え方が可能になるということを暗に意味している。だから、社会科学では論争が起こった場合、決着のつく場合とつかない場合が起こりうるのである。また、実験ができない社会科学は、具体的存在を例証

として利用するという方法をとらざるをえない。

マルクスは、資本主義の発達と同時にその遅れから来る問題にも注意を促す。「われわれは、生きているものに悩まされているだけでなく、死んだものにも悩まされている。 " 死者が生者をとらえる！ "」（新版第1分冊12頁、新書版第1分冊10頁、原文15頁）

マルクスは、19世紀における労働者階級による変革に期待を寄せた。「18世紀のアメリカ独立戦争がヨーロッパの中間階級〔ブルジョアジー〕にたいして出動準備の鐘を打ち鳴らしたように、19世紀のアメリカの内乱〔南北戦争〕はヨーロッパの労働者階級にたいして出動準備の鐘を打ち鳴らした」（新版第1分冊13頁、新書版第1分冊11頁、原文15頁）

「イギリスでは変革過程が手に取るように明らかである。……そのために私は、ことにイギリスの工場立法の歴史、内容、成果に対して本巻のなかであるように詳しい叙述のページをさいたのである。」（新版①13頁、新書版①11頁、原文15頁）この工場法の叙述は、すでに述べたように、多くが完成稿において付け加えられた部分であり、イギリスの労働者階級の闘いをマルクスは高く評価し、本文では、国際労働者協会の闘いを紹介し、アメリカの8時間労働運動を高く評価した。

「たとえある社会が、その社会の運動の自然法則への手がかりをつかんだとしても—そして近代社会の経済的運動法則を暴露することがこの著作の最終目的である—その社会は、自然的な発展諸段階を跳び越えることも、それらを法令で取りのぞくことも、できない」（新版①14頁、新書版①11～2頁、原文15～6頁）

「経済的社会構成体の発展を一つの自然史過程ととらえる私の立場は、他のどの立場にもまして、個々人に諸関係の責任を負わせることはできない。個人は主観的には諸関係をどんなに超越しようとも、社会的には依然として諸関係の被造物なのである」（新版①14頁、新書版①12頁、原文16頁）

経済学では、階級利害によって自由な科学的研究が妨げられる可能性がある。しかし、「奴隷制の廃止以後、資本および土地所有諸関係の変化が日程にのぼっている！」とアメリカ合衆国副大統領ウェイドに言わしめた事実が引き起こされている。マルクスは、19世紀半ばにおいて資本主義社会が生み出す膨大な労働者階級が団結し、知識に導かれることによって、政治権力を獲得することに期待したのである。

しかし、マルクスがいうように「あすにも奇蹟が起こるだろう、ということの意味しな」かったのである。

あとがき〔第2版への〕1873年1月24日

このあとがきは、マルクスが期待をかけた闘争、1871年、パリコミュンンの後に書かれたことに注意しよう。事実マルクスは、本書の徹底的書き換えができなかった事情

について、次のように述べている。「・・・本書が売れ切れになり、第2版の印刷は1872年1月にはもう取りかからねばならない、という知らせを私が受け取ったのは、やっと1871年の秋のことで、さし迫った別の仕事（国際労働者協会での闘争）の真っ最中のことだったからである」（新版①18頁、新書版①16頁、原文19頁）。

『資本論』がドイツの労働者階級の広い範囲にわたって急速に理解されだしたことは、私の仕事への最高の報酬である」と述べると同時に、ドイツの経済学者へ、『資本論』を無視したことへの辛らつな批判を展開している。

まず、「経済学はドイツではこんにちにいたるまで外国の科学のままであった」（新版①19頁、新書版①17頁、原文19頁）その理由は、資本主義的生産様式の未発達。資本主義が発展してくると、今度は、経済学は墮落していた。

イギリスの例：「イギリスの古典派経済学は、階級闘争が未発展の時期のものである」「1820-1830年の時代は、イギリスでは、経済学の領域での科学的活気によって特徴づけられている」（新版①21頁、新書版①18頁、原文20頁）。しかしと、マルクスは言う。1830年になって、最終的に決定的な危機がやってきた。科学的なブルジョア経済学の吊いの鐘となる。「私利を離れた研究に代わって、金で雇われた論難攻撃が現われ、とらわれない科学的探究に代わって、弁護論の非良心と悪意とが現われた」（新版①23頁、新書版①19頁、原文21頁）

J.S.ミルに対するマルクスの評価：「無気力な折衷主義」「ブルジョア経済学の破産宣告」（新版①23頁、新書版①20頁、原文21頁）

ドイツの経済学の遅れ→『資本論』の黙殺、それに対するマルクスの怒りは、相当なもの『資本論』の文章上の欠陥を私以上に厳格に判断しうるものはだれもない。（新版①25頁注（1）新書版①21～2頁、原文22頁）言葉どおりとれば、マルクスは、かなり傲慢！！

『資本論』で用いられた方法は、・・・あまり理解されていない。形而上学、ヘーゲルの詭弁、I.I.カウフマン「カール・マルクスの経済学批判の見地」『ヴェーストニク・エヴローパイ』（ヨーロッパ報知）における正当な評価。

「研究の方法」と「叙述の方法」（新版①32頁、新書版①27頁、原文27頁）いわゆる、下向方法と上向法

マルクスは、ヘーゲルの弟子であることを公然と認めた。ヘーゲルは、「弁証法の一般的な運動形態をはじめて包括的で意識的な仕方叙述した」「弁証法はヘーゲルにあっては逆立ちしている。神秘的な外皮のなかに合理的な核心を発見するためには、それをひっくり返さなければならない」（新版①33頁、新書版①28頁、原文27頁）

「現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的な側面からとらえ、なにものによっても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的であるからである」（新版①33～34頁、新書版①29頁、原文28頁）

経済恐慌のとらえ方→「資本主義的生産社会の矛盾に満ちた運動」「近代産業が通過する周期的循環の浮沈」「この浮沈の頂点が —— 全般的恐慌である」(新版①34 頁、新書版①29 頁、原文 28 頁)

〔フランス語版への序言とあとがき〕 1872 年 3 月 18 日、1875 年 4 月 28 日

「このフランス語版は、どんな文章上の欠陥があるにしても、原本とはまったく別な一つの科学的価値をもつものであって、ドイツ語のできる読者によっても参照されてしかるべきものである」(新版①37 頁、新書版①33 頁、原文 32 頁)

第 3 版へ 1883 年 11 月 7 日

マルクスの死 1883 年 3 月 14 日

「この 3 版では、著者自身を変えたであろうことを私が確実に知っていない言葉については一語も変えてはいない」(新版①41 頁、新書版①35～6 頁、原文 34 頁)

編集者の序言〔英語版への〕 1886 年 11 月 5 日

- ・ 第 1 巻は、「一つの独立した著作 (新版①48 頁、原文 39 頁)
- ・ 「『資本論』は大陸ではしばしば「労働者階級の聖書」と呼ばれている」(新版①48 頁、原文 39 頁)
- ・ 「〔マルクス〕その人の全理論は、イギリスの経済史と経済状態とにかんする終生の研究の成果であり、またその人はこの研究によって、少なくともヨーロッパでは、イギリスこそ、不可避な社会革命が合法的な手段によって完全に遂行される唯一の国である、という結論に達したのである」(新版①50 頁、原文 40 頁)

第 4 版へ 1890 年 6 月 25 日

マルクスは、引用に当たって「偽って付け加えた」のか、をめぐっての論争。
エリナー・マルクスの結論。「マルクスは、グラッドストンの演説中のある一句、疑いもなく語られたのだが、とにかくハンサードから脱落していた一句を、復活させ、忘却から救ったのである」